

驚くべき恵み

井口智子

奨励者紹介[いぐち・さとこ]

日本キリスト教団河内松原教会牧師

「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言うておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」

(マタイによる福音書 18章10—14節)

ひとりを救うために～その1～

私は今年の1月に60歳になり還暦ということで、久しぶりに家族全員集合し、還暦祝いをしてくれることになりました。冬期休暇をいただき、礼拝説教をしてくださる牧師も整い、準備万端で当日まで数日となったその晩、高熱が出ました。インフルエンザでした。お祝い会は無期延期です。楽しみの冬期休暇でしたが、誰とも接触しないように牧師館でひとり寝込んでいると、つけっぱなしのテレビから、次のような言葉が聞こえてきました。

「神さまは、1匹の羊を探しに行きました」

高熱のため意識がもうろうとする中、「これは聖書の話。癒されるなあ」と、しんどいながらも嬉しい気分で耳を傾けました。すると、今度はこのような言葉が聞こえました。

「神さまは1匹の羊を救うために、99匹を犠牲にしたのよ。だから1匹を犠牲にして、99匹を助けるべきよ」。

ビックリしました。もうろうとしていた意識が、あまりの驚きで、しゃきっとしました。そんな解釈を、たとえテレビドラマであっても言うてくれるのは困るなあと困惑してしまいました。このテレビドラマは、いったい誰が作ったのかとネットで調べました。原作は、遠藤周作さんの小説『真昼の悪魔』でした。セリフの主は主人公の女医さんでした。「神さまは1匹の羊を救うために、99匹を犠牲にしたのだから、99匹を救うために、1匹を犠牲にしていい」というのは、人体実験を決心させるための場面でした。遠藤周作さんの作品は、最近も映画「沈黙」もありましたが、よく映画化されます。私は同志社大学在学中、一般教養科目で「キリスト教文学」の授業をとっていましたが、それも遠藤周作さんの作品でした。個人的にはあまり読んでいませんが、『深い河』を読んだときは衝撃的でした。奥深い心理的作品が多いですね。

さて、羊飼いが1匹の羊を探しに行ったら、残りの99匹の羊はどうなるのだろうと、確かに素朴な疑問かもしれません。私はこのテレビドラマをきっかけに、すっかり忘れていたある出来事を思い出しました。

ひとりを救うために～その2～

それは何十年も前、私が中学3年の時の出来事です。美術の時間で、教室で絵を描いていました。お喋りをしながら和やかな雰囲気の中で絵を描いていました。その時です。教室の後方から、先生の声が聞こえました。「A君、席に戻りなさい」。A君に注意する先生の声でした。A君が席に着かず、教室後方の窓際に立ち、静かにずっと外を見ていたのです。それで先生が席に戻り絵を描くようにと注意をしたのでした。その美術の先生は伊藤先生といって、眼鏡をかけておられ、なぜか「網走ゴリラ」というあだ名がついていたことも思い出しました。あだ名からのイメージとは逆で、強面でもなく細身の体形で、また頭ごなしに怒るような先生ではありませんでした。時代は70年安保の時で、いわゆる「人権派」と呼ばれる先生がたくさんおられました。公立中学でしたが、人権学習が毎月毎週のようにあったと記憶しています。

教室は伊藤先生の声で一瞬静まり返り、みんな振り返り、教室後方の2人を見ました。先生がA君を席に戻そうとA君の腕をつかもうとした瞬間、A君は先生の手を払いのけました。するとA君の手が先生のお眼鏡にかかり、眼鏡が床に落ちました。それを先生が拾おうとした時、A君は走って教室から出て行きました。先生は眼鏡をかけ直して、「A君を連れ戻してくるわ」と言って、教室を出て行かれました。ほんの数分の出来事でした。私たちみんな後ろを見ていましたが、前に向き直して、普通に絵を描き始めました。再びお喋りしながら和やかな雰囲気の中で、絵を描いていました。その時です。教室前方の戸が、ガラガラと、ちょっと大きい音で開きました。担任の永井先生が入って来られました。明らかに怒っている感じでした。教室は、また静まり返りました。永井先生は教室で自習している私たちに、このようなことを言われました。「なぜ普通に座っているのか。なぜ何もなかったようにしているのか。今、クラスの1人がなくなったのだ。クラスというものは家と一緒になんだ。家にはいくつもの柱があって、その柱1本1本全部で家を支えている。その内の1本がなくなると家は倒れる。だから、柱1本1本全部が同じように大事なのだ。クラスも一緒。3年11組の一人ひとりが支え合うから、クラスがあるのだ。家の柱が1本無くなったら、家は倒れる。同じように、クラスの1人がなくなったら、クラスは倒れる」。永井先生はすごい剣幕で話し、特に「○○をしなさい」とは言わず、教室から出て行かれました。A君が1匹の羊で、教室にいた私たちは、まさしく99匹の羊状態です。残された99匹の羊状態の私たちは、どうしたと思いますか。

まず、リーダー的な生徒が立ち上がりました。そしてA君を探しに行く者、教室で待つ者、さっと決まりました。教室に残った者の内、A君のためにノートを書く者がいました。A君は静かな男の子なのですが、少し校則違反の服装をしていて、教室にいないことが多かったのです。他のクラスに友だちがいるようで、自分たちのクラスで誰かと親しく喋る様子を見た記憶がありません。私も一度もA君と会話をしたことがありませんでした。実は、A君は複雑な家庭環境で育ち、悩みや苦しみを抱えていたということの後から知りました。今思うと、私たちがA君を見ないようにして、そのうちA君が教室にいらなくても気がつかないようにしていたのです。気づかれないA君ではなく、私たちが気づこうとしていなかったのだと思います。つまりは「無関心」ということです。その出来事をきっかけに、A君のためにノートを書く者がさらに増えました。私もその1人でした。そして卒業少し前に、A君は九州の中学に転校して行きました。九州のA君から、クラスの私たちに手紙が届きました。「あの時、とても嬉しかった。転校先の九州の学校で頑張る」という内容でした。

誰も犠牲にならない

出て行った1匹は犠牲になっていません。残りの99匹も犠牲になっていません。テレビドラマのセリフのように、99匹は単に置いていかれたのではありません。99匹は犠牲になったのではありません。99匹にはその1匹のために、それぞれにできることがあったのです。私は牧師なので、現場は主に教会です。もしも、教会にいる私たちが99匹なら、何ができるのか想像しました。その1匹のために、そのひとりのために、お腹が空いているかもしれないと、何か食べる物を用意する人がいるかもしれません。飲み物を用意する人もいるでしょう。カードや手紙を書く人もいるでしょう。何より、無事でありますようにと祈るでしょう。どれも、その1匹、そのひとりを思う心です。「愛」です。

ところで、「愛」の反対は何だと思えますか。マザーテレサさんの言葉にあります。「愛の反対は、憎しみではありません。無関心です」と。たとえば、同窓会に行き、「え、同じクラスだった？気づかなかった」と言われると、かなり傷つきます。無関心とは、その人を気にも留めない、その人のことを思わないということです。無関心の対象者にとっては、目に見えない武器・凶器を突き付けられているようなものです。改めて、中学での出来事は、A君に対して無関心という凶器を突き付けていたのだと思いました。愛のない行動「無関心」それは自分でも気がつかないうちに、誰かを傷つけ排除しているかもしれないのです。

聖書にマルコによる福音書というのがあります。そこに、私たちが守るべき重要な掟は何なのかと聞かれたイエス様がこのように話されています。

「第一の掟は、神様を愛しなさい。第二の掟は、隣人を自分のように愛しなさい」。

「隣人」とは、「親しいお隣さん・お友達」を言っているのではありません。むしろ親しくない人をも含める隣人です。でも現実には、隣人を自分のように愛することは、なかなか難しいです。私たちは誰でも弱いです。誰も完全ではなく、欠けが多く弱いです。やっぱり自分が大事で、自分の大切な人が大事です。つい自分を最優先にしがちです。でも、イエス様が「隣人を自分のように愛しなさい」と私たちにおっしゃるということは、私たちには、それができるといことなのです。「自分のように、隣人を愛する」ことが「できる」といことなのです。誰かのために、その時、その状況の中で、私たちには、愛をもってできることが必ず「ある」といことなのです。私たちは、神様から、人を、隣人を、愛することができる賜物をいただいているからです。神様は、誰も犠牲とならないように、1匹も99匹も救われるように、私たちに愛することができる賜物をくださっているのです。羊飼いが、その1匹を探しに出かけるとき、残される99匹には、99匹それぞれができる愛する力と勇気を与えてくださっているのです。とても大きな恵みです。

私たちは弱く欠けの多い存在ですから、1匹の羊にも99匹の羊にも、そのどちらにもなり得ます。でも神様は、1匹の羊も99匹の羊も救われます。誰も犠牲になりません。

私たちは、1匹の羊を作らないために、また1匹の羊のために、99匹の羊のために、「愛する力」「愛する勇気」をいただいていることを信じ歩んで行きましょう。神様に感謝したいと思います。